

第 23 号

1997年 9 月

岡山県古代吉備文化財センター

▲ 西江遺跡（哲西町）出土特殊器台文様



橋脚と基礎の様子（東から）

## “室町時代の橋脚” 見つかる！ —岡山市・百間川米田遺跡—

岡山県古代吉備文化財センターでは建設省から委託を受け、百間川改修に伴う発掘調査を昭和52年から行っています。

平成9年4月からの百間川米田遺跡の発掘調査では、今から約600～700年前（室町時代）に架けられていた橋の跡が発見されました。この橋は長さが40mに及ぶと考えられ、これほど大きな橋が検出された例は少なく、また橋の基礎

構造の残存状況も極めて良いことから、考古学のみならず土木工学の分野からも注目されています。以下それぞれ説明していきます。

橋は南西から北東方向に流れる旧河道に架けられています。確認された橋脚は2本一対で約4mの間隔をあけて7～8カ所に、直径30cm前後の太い松の杭が打ち込まれています。この橋脚から橋の規模は、全長40m、幅2.3mである

と考えられます。また橋脚の周りからは、全国でも初めての工夫をこらした基礎が見つかりました。この基礎は捨て石（大小の角張った石）をすき間なく敷いて橋脚を固定するとともに、橋脚に当たって水の流れが川底を掘り返して橋が傾くのを防ぐ役割を持っています。そして、特に注目されるのは捨て石が水の流れによって流出しないための工夫がこらされていることです。これは、橋脚列を中心に約4.5mの幅で縦杭、横木、板を組み合わせて、橋に平行した木枠を作るといふものです。この木枠は外側に直径約10～20cmの杭を30～50cm間隔に打ち込み、その内側に直径5～10cmの木を横方向に添えています。さらに横木の内側に幅5～10mの板材を数枚重ねて打ち込んでいます。また捨て石の下にはたくさんの粗朶（＝小枝）が所々に見えており、おそらく捨て石をする前に木枠の内側全面に粗朶を敷き詰めて石が沈み込まないようにしていると考えられます。捨て石の南東部には大きめの石を「コ」の字形に並べた区画段があります。この地点は東側の川岸まであと10m前後の位置と考えられますので、橋が川の内側へ沈み込まないように、川岸へと階段状に続く構造物の一部ではないかと考えています。こうした基礎構造が明らかになったのは、岡山県では初めてであり、全国的にみても滋賀県大津市の「勢多唐橋」に次いで2例目です。



木枠の検出状況

出土遺物は、捨て石のすぐ上に堆積した砂の層や捨て石の間から、土器や瓦の他に、古銭約150枚、把手状の銅製品や破片5点、木簡6点などが出土しました。

古銭は橋の中央部とその上流を中心に限定された範囲から出土しました。大半は中国の宋や明の時代に作られたものです。そのうち一番新しいものは「永楽通寶」（1408年初鑄）です。

木簡6点のうち4点は柿経（こけらきょう）と判明しました。柿経は薄く細長い板にお経を書き写したもので、今回見つかった柿経には『法華経』が書かれていました。柿経は一般的には、お経を書き写すことによって功德を積むためのものと考えられ、お寺に納められたり、お墓に供えられたり、海や川に流されたりしたようです。

その他の遺構としては、この中世の橋の南側に全長8m、幅約1mの小さな橋も見ついています。この橋は中世の橋が流されたのち架けられたものです。このころには、堆積作用によって川幅もずっと狭くなっていたようです。また室町時代の貝塚（ハイガイ、シジミ）も見ついています。

今回発見された橋は、推定全長40mにおよぶ大きさとその強固な基礎により、当時の土木技術を知る上で極めて貴重な発見であるといえます。またこの橋の南東500mの地点では中世の屋敷地と船が出入りできる幅約7mの運河のある「港町」が見ついています。この橋は架けられている方向や位置から、この港町に通じているとみられ、当時のにぎわいを想像することができます。さらに、出土した多量の古銭や柿経は、当時の橋や川に関する習俗の一端を明らかにする手がかりになるものと考えられます。

（加藤和歳）

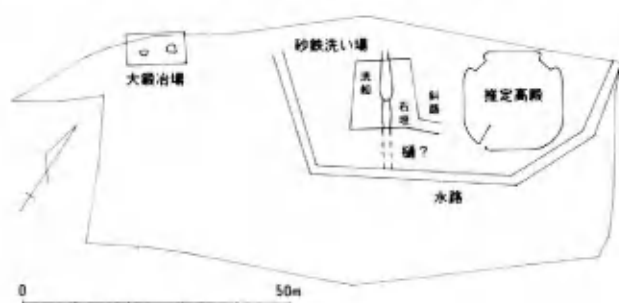


粗朶の検出作業

# 県内初！ “砂鉄洗い場” 確認 —神郷町・大成山たたら遺跡群—

大成山たたら遺跡群は平成7年度から継続調査しており、昨年度の全面調査では、中世から近世初頭に比定される製鉄炉地下構造2基、近世の高殿たたら床釣り（防湿と保温のための地下構造）施設1基と2ヵ所4群に分けられる大鍛冶炉（包丁鉄と呼ばれる製品に仕上げるための炉）29基の製鉄関連遺構と、一字一石経塚1基を発見しました。今年度は、近世初頭と考えられる製鉄炉地下構造1基と近世末から近代初頭にかけて操業していた製鉄場の高殿（製鉄炉がある建物）、砂鉄洗い場兼置き場、大鍛冶場を発見し、それらの構造・配置と水路による水配りの状況が明らかになりました。これらのうち、砂鉄洗い場は県内初例となります。

製鉄の原料となる砂鉄は、多くの場合鉄穴流しと呼ばれる水を利用した比重選鉱法で採取し、製鉄場に運ばれてきます。しかし、製鉄場に持ち込まれた砂鉄には不純物（主に砂）が多く含まれていることがあるため、最終精洗場である砂鉄洗い場が設けられたのです。今回調査された砂鉄洗い場は、高殿の西隣に位置し、約14×15mの平面台形状を呈する平坦面には貼床がされています。この中央には、松材を用いた底板が残存する長さ約7m、幅約1mの洗船（砂鉄精洗用洗樋）とこれに水路から水を導くための石垣が組み立てられていました。この洗船に砂鉄と水



B区製鉄関連遺構配置図

を流し込み、鍬のようなもので攪拌・洗滌して重い砂鉄が底に沈んだところで砂を含んだ水を流します。こうして得られた純度の高い砂鉄は砂鉄置き場で乾燥させてから、一段高い高殿へ斜路を通り運ばれ、製鉄炉に入れられました。

今年度後半には、立地から近世前半と想定される製鉄炉をもう1基調査する予定であり、新たな資料の蓄積が期待されます。（小嶋善邦）



砂鉄洗い場検出状況（北西から）



洗船底板残存状況（北東から）



山口県白須たたら砂鉄掛取場絵図

〔先大津阿川村山砂鉄洗取之図〕江戸科学古典叢書1 1986  
より転載、東京大学工学部地球システム工学科所蔵掲載許可済

## （苦田ダム建設に伴う発掘調査で新たな発見！）

苦田ダムが建設される奥津町の久田地区には、河内城、上原城、比久尼ヶ城、城峪城の4つの山城があります。これらの城は、その全長が100m前後と小さいことから、むしろ砦と呼んだほうが相応しいものです。城のつくりを見ると、段（犬走り）の山側に溝を掘り、あたかも斜面に土塁を築いたような構造となっています。このような構造はこれまで知られておらず、この地域の特徴と考えられます。また、城を丘陵から切り離すために掘られた2条の堀切は、幅や深さはさまざまですが、その堀底の距離が約11m（6間）と共通しています。出土遺物はごく少量ですが、土師器の碗や小皿、鍋、備前焼の甕や播鉢、青磁の碗、白磁の皿、鉄鎌や鉄釘、土錘、輸入銭などがあり、いずれも14～15世紀頃のものようです。こうしたことから考えるとこれらの城は、室町時代前半に同一の勢力により相次いで築かれたものと見てよさそうです。

室町時代、この辺りには久田荘と呼ばれる荘園が開かれていました。その実態は必ずしも明らかではありませんが、久田下原にある堀ノ内遺跡などは、この荘園を管理・支配した領主の館跡と思われます。発掘調査を実施したこれらの城も、おそらく荘園を護るために村ごとに築かれた砦だったのでしょう。

さて、こうした山城が見下ろす平野部でも、発掘調査の進展によって新たな事実が次々と明



河内城跡全景（北から）



久田原古墳群全景（南から）

らかになってきています。堀ノ内遺跡に隣り合う久田原遺跡では、縄文～室町時代の集落や墓が見つかっています。ことに、奈良時代には大形の建物が複数あり、丹塗りの土師器や円面硯、鍛冶滓なども出土していることから、上流で生産された鉄を農具などに加工して都へ運ぶ出先の役所があったのかもしれませんが。

また、ここでは6基の古墳がまとめて検出されました。いずれも古墳時代後期（6世紀前半～7世紀前半）のもので、木棺、石棺、横穴式石室などさまざまな埋葬施設をもち、須恵器、土師器をはじめ管玉や丸玉などの装身具、馬具や鎌などの鉄器が出土しています。奥津町ではこれまで古墳が1基しか見つかっていませんでしたが、こうした低地にも古墳が築かれていたことが今回の調査で明らかとなりました。

縄文～弥生時代の遺跡は、こうした古墳の1mほど下層で確認されており、現在とはやや異なる地形が広がっていたことが分かってきています。今後さらに調査が進めば、この地域の歴史を解明するうえで貴重な資料が得られるものと期待されます。（亀山行雄）

むろ おい しゅうたにぐち

## 室尾石生谷口古墳の発掘調査

室尾石生谷口古墳は、苫田郡加茂町青柳石生谷口に所在し、主要地方道津山智頭八東線改良工事に伴う発掘調査によって、横穴式石室を主体部にもつ円墳であることが明らかになりました。調査は、平成9年4月から6月までの3ヵ月間行いました。

調査の結果、古墳の上半部はかなりの削平を受けているものの、円墳の規模は直径約15mを測り、石室の正面のみを葺石によって飾る構造であることが明らかになりました(写真1)。横穴式石室は、奥壁幅1.7m、全長8.5mの無袖型の石室です。また石室の床面は、入り口部から約4mの地点までは敷石があり、その奥は地山を削り出したままの構造です(写真2)。古墳と石室の全長ともに、同じ加茂町に所在する方燈山古墳より一回り小さくなります。

横穴式石室の中は数回の盗掘を受けていましたが、勾玉13個体・管玉18個体・切子玉4個体・霰玉1個体・白玉2個体を中心に小玉を含めると100個体以上の多量の玉類が出土しました。

玉類以外にも、耳環9個体と刀子・鉄鏃・鉄釘などの鉄製品が多数出土しています(写真4)。また須恵器も杯(蓋・身)・甕・平瓶・提瓶などが出土しています。これらの須恵器から、室尾石生谷口古墳の年代は7世紀前半であると考えられます。

石室の中からは人骨の破片が少量出土しましたが、埋葬人数を推定することはできません。しかし、玉類の出土の集中する地点が何ヵ所か存在すること、耳環が多数出土することなどから複数の埋葬人数が考えられます。石室に敷かれた敷石は、上下から須恵器が出土しており、上下の須恵器の間に若干の時期差があることから、この敷石は2回目以降の埋葬の時に敷かれたものと思われます。

また古墳の墳丘の中から、石列が発見されました(写真3)。これは石室構築の最終段階に築かれたもので、石室構築方法の解明のための貴重な資料といえます。

(小林利晴)



写真1 室尾石生谷口古墳全景 (南東から)



写真2 横穴式石室全景 (南から)



写真3 墳丘上に築かれた石列 (東から)

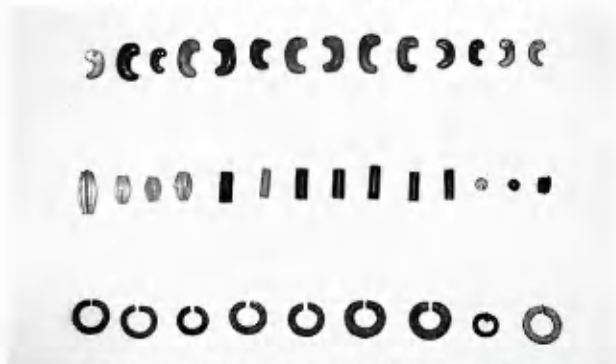


写真4 主要出土遺物 (玉類、耳環)

## 出土品紹介

# 弥生時代のお面

—岡山市・田益田中遺跡—

岡山市街地の北西に位置する田益田中遺跡は、縄文時代後期から中世にかけての複合遺跡で、笹ヶ瀬川の調節池建設に伴い平成7、8年度の発掘調査により溝、土壇、多数の柱穴、井戸、竪穴住居等の遺構が発見されました。

今回紹介する土製品は、調査区のやや北よりの弥生時代前期の旧河道の埋土中から出土したものです。土製品出土の河道は、同じ後期の河道により大半が削平されており、わずかに肩口の一部が残っているのみでした。

出土品は、長辺8cm、短辺4.3cm、厚さ0.8cmの顔面表現の一部で、若干弧を描いています。中央には、鼻を立体的に表現し、両眼および口は欠損しているものの、いずれも切り抜いています。復元すると一辺10cm程度の土面のような器形が考えられます。特徴的なことは、両眼と口の周囲に左右対称に、ヘラ状工具による線刻が弧状に3条施されていることです。

このような線刻を施した弥生時代の顔面表現は、魏志倭人伝に記述の入れ墨の表現との解釈が有力で、今回出土の土製品も、西日本に類例の多い線刻顔面の土製品と共通した特徴を持っています。小片ではありますが当時の風俗や慣習を解明するための貴重な資料といえます。

(山磨康平)



## 普及啓発事業から

### 1 現地説明会

当センターでは、調査中の遺跡を多くの方に見ていただくため、現地説明会を開催しています。本年もこれまでに、百間川米田遺跡(7/19(土))と城峪城跡(8/9(土))で説明会を開催し、計427名の方々に参加していただきました。

—その場所には昔何があったのか、  
人々が何をしていたのか。—

皆さんも機会があったら、説明会に参加して遺跡を見ながらあれこれ考えてみませんか。



百間川米田遺跡の現地説明会

### 2 「最近の岡山県下における

#### 埋蔵文化財発掘調査概要の報告会」

当センターでは、前年度の発掘調査について、スライドによる報告会を毎年開催しています。ここでは県下の市町村教育委員会の協力を得て、各地域の発掘調査についても報告しています。

本年は、8月23日(土)に岡山県生涯学習センターにおいて、次の8遺跡の報告がありました。

- (1)田益田中遺跡・・・当文化財センター
- (2)旦山遺跡・・・当文化財センター
- (3)田邑丸山古墳群・・・津山市教育委員会
- (4)水別遺跡・・・当文化財センター
- (5)三須・河原遺跡・・・総社市教育委員会
- (6)鬼城山(鬼ノ城)・・・総社市教育委員会
- (7)熊谷城跡・・・御津町教育委員会
- (8)岡山城本丸・・・岡山市教育委員会

参会者は168名を数え、熱心に報告を聴くとともに、疑問などを発表者にたずねていました。

## 「新発見考古速報展 発掘された日本列島'97」のお知らせ

日本各地で最近話題になった出土遺物を一挙に展示する「新発見考古速報展」(文化庁・開催機関主催)は今年で3年目を迎え、いよいよ岡山県立博物館でも開催することになりました。

各地の遺物を集め、すでに全国を巡回している中核展示に加え、県立博物館では「吉備一大地からのメッセージ」と題して、同時に地域展示も行う予定です。



政所遺跡の  
分銅形土製品

高塚遺跡の銅鐸

この地域展示では、ここ数年のうちに県下で出土したさまざまな珍しい遺物や学術的価値の高い遺物が出品される予定になっています。当センターでもこれまでの調査で出土した遺物を展示に向けて準備しているところです。

新聞やテレビでしか見たことのないあの遺物やこの遺物、また初めて目にするものもたくさんあることでしょう。この機会にぜひご覧ください。

### 「新発見考古速報展

### 発掘された日本列島'97」

期 間 平成9年12月1日(月)~23日(火祝)

場 所 岡山県立博物館

(岡山市後楽園1-5)

中核展示 近年話題になった日本各地の出土遺物

地域展示 最近10年間で出土した県内の主な遺物を網羅

## 阪神・淡路大震災の復興支援職員から

平成7年1月に発生し、多くの犠牲者を出した阪神・淡路大震災ですが、それ以来、神戸市やその周辺地域で復興事業が進められています。これにより事前の埋蔵文化財発掘調査が急増することが予想され、その支援策として全国から調査員の派遣が行われています。岡山県教育委員会でも、これまでにのべ3名の職員が当文化財センターから派遣されています。最初に派遣された岡本文化財保護主事は、当時をふりかえり、次のように述べています。

「早いもので、私が復興調査班の一員として兵庫県に派遣されてから2年がたちます。赴任当初、廃墟と化した街を目のあたりにして、こんな時に発掘調査などできるのか、と不安を覚えたことが思い出されます。幸いに、地元の方々のご理解・ご協力のもとに、担当した神戸と芦屋の6現場すべてで調査を無事終えることができました。あの頃に比べ、被災地の復興も

目につきやすい範囲ではかなり進んだようですが、今後は大規模開発よりも地域住民の視点を重視した復興を望みたいものです。」

今年度派遣されている氏平文化財保護主事は、現在の様子をこう述べてくれました。

「私は復興調査が開始されて3人目の派遣になります。今年度の復興調査の傾向としては、民間の大規模な開発や、区画整理事業でも比較的早く協議がまとまった場所の発掘調査が一段落した、というところですか。今年で3年目の復興調査ですが、派遣3年目の人も、今年からの人も、兵庫県の人も、和気あいあいと(?)交流しながら調査に取り組んでいて、悲愴感は少ないようです。ただし、調査報告書作成の話となると・・・。」

最後に、二人とも「関係各位のご協力に感謝するとともに、一日も早く復興を成し遂げられることを期待しています。」とのことでした。

# 岡山県古代吉備文化財センターの組織と職員（平成9年度）

## <組織>



## <職員>

所次	長	篠本 克之
	長	正岡 睦夫
総務課	長	小倉 昇
総務係	課長補佐(係長)	井戸 丈二
	主査	木山 伸一
	主事	柚木 寿志・西山 泰晴
		志摩 尚史・金出地敬一
		開野 良一
調査第一課	課長	高畑 知功
第一係	課長補佐(係長)	江見 正己
	文化財保護主査	高崎 東(県立博物館兼務)
	文化財保護主任	宇垣 匡雅
		大橋 雅也(文化課本務)

文化財保護主事	速水 幸人	氏平 昭則(兵庫県派遣)
	榎本 智宏・金田 善敬	
	岡本 泰典	
主事	杉山 一雄・時實 奈歩	
第二係	課長補佐(係長)	松本 和男
文化財保護主査	平井 泰男・中務 和彦	
文化財保護主事	岡田 達矢・土師 忠満	
主事	難波 拓史・弘田 和司	
	柴田 英樹	
	清水 竜太・藤田 薫	
調査第二課	課長	伊藤 晃
第一係	課長補佐(係長)	中野 雅美
文化財保護主査	光永 真一	
文化財保護主事	澤山 孝之・物部 茂樹	
主事	小嶋 善邦・加藤 和哉	
第二係	課長補佐(係長)	山崎 康平
文化財保護主幹	浅倉 秀昭・福田 正敏	
文化財保護主査	岡本 寛久	
文化財保護主任	三宅 勝己	
主事	大森 充宏・高田恭一郎	
	重根 弘和	
調査第三課	課長	柳瀬 昭彦
第一係	課長補佐(係長)	岡田 博
文化財保護主査	易 伯通・山本 道夫	
文化財保護主任	亀山 行雄・井上 吉和	
主事	佐藤 寛介	
第二係	課長補佐(係長)	井上 弘
文化財保護主幹	二宮 治夫	
文化財保護主査	木原 義明	
文化財保護主事	砂 泰壽・尾上 元規	
	蛭原 啓介	
第三係	課長補佐(係長)	下澤 公明
文化財保護主幹	内藤 善史	
文化財保護主任	田井 莊之助・築地 由行	
文化財保護主事	渡邊 恵里子	
主事	小林 利晴	



## 編集・発行

### 岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-01

岡山市西花尻1325-3

電話 (086) 293-3211

#### ●交通案内

- ・JR山陽本線庭瀬駅下車タクシー10分
- ・JR吉備線吉備津駅下車徒歩25分
- ・JR岡山駅下車岡電バス岡山駅前より神道山行終点下車徒歩5分